# 中国青海省黒河最上流部における人口変動プロセス

尾崎孝宏

## 問題意識

本論は、中国の代表的な内陸河川の一つである黒河の最上流部、現在の行政区画では青海省祁連県西部において、現在見られるような住民構成が形成されてきたプロセスを提示することを目的とする。本論は、総合地球環境学研究所が行う研究プロジェクト「水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史的変遷」（通称オアシスプロジェクト、プロジェクトリーダー中尾正義）の成果の一部として公表されるものであるが[1]、具体的な考察に入る前にそもそも、なぜ「黒河の最上流部」という地域設定が必要なのかという点と、本論が扱う人口変動プロセスの解明が研究プロジェクト内部で持つ意味合いについて述べておきたい。

黒河は、ごく簡単に述べれば祁連山脈の氷河を源流とし、祁連山脈北麓を流れ下り、張掖を代表とするオアシス地帯を抜け、ゴビの湖へと流れ込んで消滅する。流域面積13万平方キロメートルを有し、中国の内陸河川としてはタリム河に次ぐ大きさである。こうした黒河を純粋に自然科学的な観点から分類するとなると、上流の山岳地域・中流の扇状地オアシス地域・下流の砂漠地域へと三分するのが妥当であろうし、オアシスプロジェクト内部での地域区分もこれを踏襲している。さらにこの分類方法では、黒河本流に関しては内モンゴル自治区との境界である正義峡以遠を下流、祁連山脈からの出口である鶯落峡以遠を上流とみなすことになる。数回の現地調査を通じて形成された筆者の印象としては、これは張掖オアシスに居住する人々の「黒河観」とも一致していると思われる。

しかし上述の分類法における上流部に視点を移動した場合、特に当該地域を人文社会科学的な観点から分析しようとする立場からは、この「上流部」なる分類の中に、実際には明確に差異を認識しうる2種類の地域が存在することが指摘しうる。この2種類の地域は、本来いくつかの差異の重ねあわせとして析出したものであるので、その差異を生じさせる事項について以下に指摘しておく。

1．地形。これはもとより人文社会的事象ではないが、牧地の利用パターンには影響を及ぼしうる。祁連山脈以北の黒河およびその支流は、そのほとんどが山から一気にオアシスのある低平地まで、南から北に流れ下る。そのため、河の両岸には深い谷が刻まれ、平地に乏しい。これに対し祁連山脈以南においては、黒河が祁連山脈を越えうる地点が一ヶ所だけしかないという地理的制約に起因して、西からは黒河本流が、東からは支流の八宝河が山脈の走向と平行して長距離を流れ、その結果としてこれらの河の周囲には広々とした河谷平原が形成されている。これらの平原は無論、標高という点では祁連山脈以北の谷間より高いのだが、日照量の多さと相まって一部は農耕地として利用されている。

2．行政。現在、黒河流域に関して言えば祁連山脈の主脈が甘粛省と青海省の境界になっている。後述するように、省境がこのような形で決定されるに至るのは1950年代末のことである。しかし現状としては、ほとんどの政策が国家＝省＝地区＝県という行政ラインを通じて下達されてくるため、所属する省の違いは実行される政策においても、また人の移動ルートにおいても極めて大きな制限要因として機能している。例えば甘粛省における黒河流域の環境保護関連・開発関連の政策は、当然のことながら対象となる地理的範囲は甘粛省内に限られており、祁連山脈の向こうの青海省も、正義峡の向こうの内モンゴル自治区も基本的に考慮の対象外[2]である。

3．民族と移民。黒河の下流部と上流部は、いわゆる少数民族地域、つまり漢族以外の民族籍を有する住民が多数派を占める、あるいはかつて多数派を占めていた地域である。中国国内のこうした地域では、黒河下流の内モンゴル自治区エゼネ旗でも顕著に見出せるように、往々にして「先住民としての少数民族とここ50年ほどの間

に移入が著しい漢族との間のエスニック＝コンフリクト」の類が目に付きがちである。ことに、「民族」を研究対象の枠組みとして設定することの多い文化人類学関連の研究においては、この傾向は顕著なものとなる[3]。しかし後述するように、祁連県内の黒河流域では、事情は若干異なる。まず、流入人口の中にチベット族や回族などの少数民族が多いことに加え、そもそも果たして「先住民」と呼びうる人々が存在するのか疑わしい地域も存在する。この点において、祁連山脈北麓の粛南ユグール族自治県は対照的であり、こちらにはユグール族、場所によってはチベット族が「先住民」として厳然と存在し、民族関係の構造は下流部と類似したものとなっている。

無論、この1から3による地域分類の線は、完全に重なり合うものではない。例えば粛南ユグール族自治県の楊哥郷では、黒河支流の大長干河・小長干河が東西方向に流れており、また青海側に匹敵するほどの標高の高さを有するため樹木も生育せず、比較的小規模ながら河谷平原を見ることができる。また祁連県東部の八宝河源流地域は、清朝中期以降は安定的にモンゴル族王侯を代表者とする集団の牧地となっており、現在の文脈では彼らを「先住民」と呼びうる状況にある。

しかし、こうした「ずれ」の存在はさておき、本論で言及しようとしている祁連県西部地域は、上述の1から3までの全ての事項について当てはまるという意味で、広い意味での上流部とは一線を画する最上流部の中心地域とみなして差し支えないだろう。その上、祁連県西部地域は黒河本流の源流でもあり、河流という点からも「最上流部」と呼ぶにふさわしい地域である。要するに本論は、地図上に「上流部」と「最上流部」の境界線を引くとなれば依然として検討すべき課題は存在することを認めつつも、少なくとも本論で言及する地域は「最上流部」から外れることはない、という認識の上に立脚して進められているのである。

さて、その中で人口変動プロセスがいかなる意味を持つかであるが、筆者が所属する文化人類学者を中心とするプロジェクト内サブグループでは、過去50―100年間の生産様式・水利用の変遷について明らかにすることを当座の目

的としている。既に触れたように、最上流域は過去１００年間のタイムスパンで見れば、人がほとんどいない状態から人々の移入によって現在の状態が形成されたと思われる広大な領域が存在する。こうした地域において、生産様式・水利用の変化にもっとも大きな影響を及ぼすファクターは、住民の絶対数の変化である。特にこの変化が大きければ大きいほど、及ぼす影響も大きい。

しかし、当地域は後で述べるように甘粛・青海両省の省境に関する紛糾の舞台であったため、甘粛省粛南ユグール族自治県と青海省祁連県の関与が複雑に絡み合い、さらに以前に遡れば現地の地方行政制度自体が未整備だったこともあり、どこか一箇所の地方政府から過去50年ほどの人口統計を入手して示せば事足りるという状況とは程遠い。そもそも、そうした手軽に利用できる資料がいかなる場にも用意されていないのである。それゆえ、断片的な情報を総合して過去の実態を推測するほかなく、当然そのような興味関心から行われた先行研究も存在しないのが現状である。この点において本論のような極めて基礎的な研究が意味を持つのである。

ところで、筆者がそもそも祁連県西部の人々の来歴について関心を抱くようになったのは、現地で２００４年に行った聞き取り調査の過程においてである。単にインフォーマントの民族構成が多様だっただけではなく、彼らが皆過去2—3世代以内の移住者であり、移住の来歴を多少なりとも記憶していたこと、また地方政府の幹部ですら自らの行政単位の過去について周辺地域と比較すれば驚くほど疎かった、というのが「気づき」の発端であった。さらに後述するように民族構成のバランスが取れており、かつ郷政府レベルで作成している「簡介」にも「主要民族」というような記述が見られない点など[4]、中国の少数民族地域をフィールドとしている者には却って奇妙に感じられる特徴が散見されたことが、本論文の出発点となっている。

なお、本論を構成するデータソースは、筆者自身が２００２年夏・２００３年夏・２００４年夏に行った短期の現地調査での聞き取りデータ、地方政府において収集した統計や資料類、そして現地その他の場所で購入した出版物である。なお、それぞれのデータソースの特徴を簡単に指摘しておくと、以下のようになる。

1．住民・非住民を問わず、聞き取り調査においては3世代程度の世代深度が限界である。
2．地方政府の統計などが確実に残存するのは80年代以降に関してのみで、さらに本来そうした資料が作成された目的から推量して、信憑性の問題を考慮に入れる必要がある。
3．近年の出版物では、民国期までに関しては「民族」ベースの言説が主体となり[5]他の集団も含めた空間的配置が把握しにくい一方、中華人民共和国が成立した１９４９年以降に関しては行政区画で区切られた空間で完結する言説が主体となる。ただし、後者については、出版時期以前の行政区画の変更などに関する言及は希少である。また地方政府の管轄対象外である国営農林牧場などについては、それが占める空間範囲としては郷と構造的に同レベルであるにもかかわらず言及の埒外となっている。

つまり、端的に言えば個別的には齟齬・空白のある情報群であるが、以下ではこれらをクロスチェック・統合することで、黒河最上流部における近過去の人口変動プロセスについて検討してみたい。

## 黒河最上流部の現況

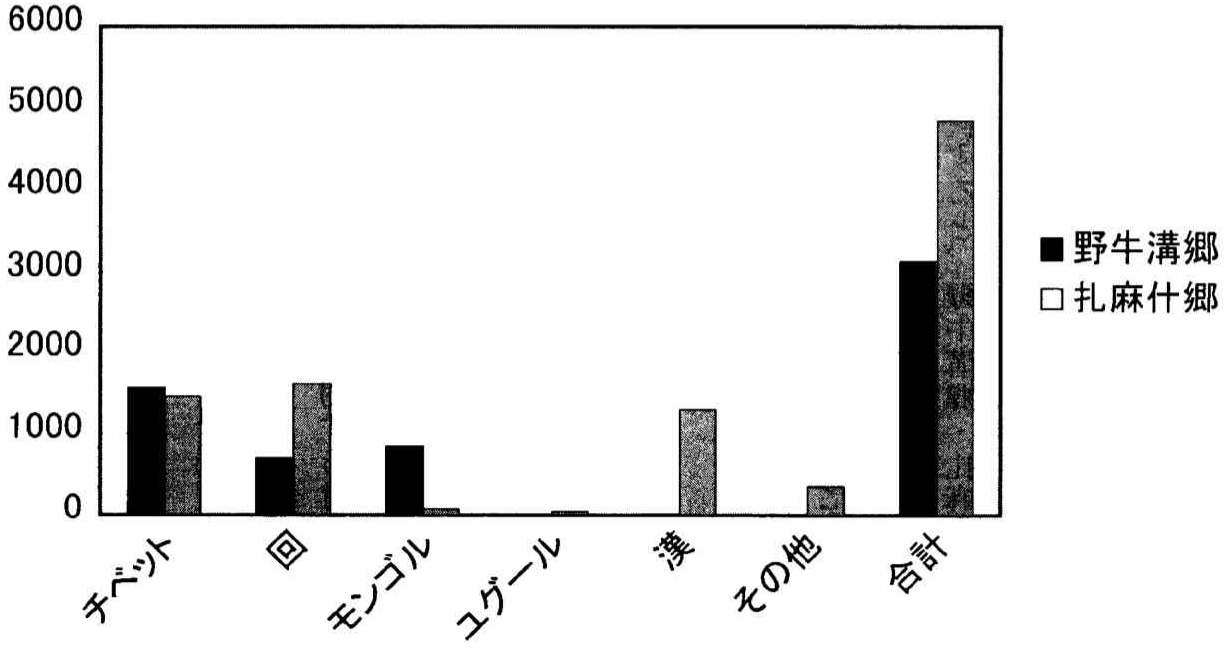
本論で言及する黒河最上流部の範囲は既に説明したが、面的範囲での人口を定量的に把握するためには、便宜的とはいえ現行の行政単位とリンクした形で対象範囲を確定することが不可欠である。そこで、中国の行政ヒエラルキーの最末端、県の下部組織である郷の文脈で「黒河最上流部」という範囲を解釈すると、野牛溝郷・扎麻什郷の全域がそれに相当することになる[6]。なお、位置的には野牛溝郷が西に位置し黒河本流の源流をその領域内に含んでおり、扎麻什郷はそれより下流側、つまり東側に位置する（地図参照）。生業面では、前者は純牧畜地域、後者は農業主体の農牧地域となっている。両郷の基本的なデータを表に、最新の人口関連のデータをグラフに示す。

表：野牛溝郷・扎麻什郷の基本的データ（1994 年現在）

| | 野牛溝郷 | 扎麻什郷 |
|---|---|---|
| 政府所在地 | 黄草梁 | 鴿子洞 |
| 総面積 | 3480km$^2$ | 568km$^2$ |
| 草原面積 | 252,975ha | 37,625ha |
| 喬木林面積 | — | 2,125ha |
| 潅木林面積 | 20,484ha | 6,425ha |
| 耕地面積 | — | 806ha |
| 海抜分布 | 3200-4800m | 2371-4667m |

（祁連地方誌編纂委員会（編）　1996:91,101）より作成

グラフ：野牛溝郷・扎麻什郷の人口関連データ
（2003年現在、縦軸の単位は人）




※現地調査で収集したデータにより作成

グラフに関して補足説明をすると、各郷の民族別人口比率は以下のようになっている。野牛溝郷では総人口３１３６人のうち、チベット族49％・モンゴル族27％・回族22％・ユグール族２％、扎麻什郷では総人口４８４６人のうち、回族33％・チベット族30％・漢族27％・その他（大多数は土族）10％である。なお、筆者がなぜユグール族という現状においては「無きに等しい」少数派について言及しているかという理由は後で詳述することになるが、簡単に言えば彼らが黒河最上流における人口移動の重要なアクターであったためである。

だが、いきなりユグール族の問題に入るよりは、そもそもこれらの郷が成立するに至るプロセスを先に検討する方が問題の本質をより明瞭に把握しうると思われるので、まずはそちらからの言及を行いたい。

## 野牛溝郷・扎麻什郷の成立過程

上述の両郷が、郷という行政単位として登場するのは古い話ではない。『祁連県誌』によれば、祁連県が中華人民共和国の正式な県として成立するのは１９５３年11月であるが、扎麻什郷が県中心地周辺の八宝郷とともに「農業郷」として出現するのは１９５１年９月のことである。野牛溝郷に至っては、１９５３年３月に扎麻什郷に所属する「純牧業村」という位置づけの行政村として初めて出現し、野牛溝郷が設定されるのは１９５８年９月のことである（祁連県誌編纂委員会（編）　１９９３：19-25，50-51）。

それでは、１９５０年代より前、この一帯の情況はどのようだったか。同じく『祁連県誌』および『祁連資源誌』より関連する情報をピックアップすると、以下のようになる。なお、情報は時間をさかのぼる形で提示している。

1．解放初期、馬歩芳部隊の残党３百余名が武装して深山密林に潜伏し抵抗を続けた。１９５１年３月に彼らの３回目の侵攻が失敗すると、４月にはその一部が物資弾薬を携帯して野牛溝に逃げ込み、解放軍部隊と交戦し殲滅させられた。匪賊（国民党部隊の残党：引用者注）との戦闘は53年まで続いた（祁連県誌編纂委員会（編）

1993:411，550）

2. 1945年、民族紛争の影響を受け、海西のモンゴル族22戸60人が野牛溝へ移動し定着した（祁連県誌編纂委員会（編）　1993:503）

3. 1937年、ユグール族が続々と野牛溝、黄蔵寺に移動して「駐牧」した（祁連県誌編纂委員会（編）　1993:17）

4. 1928—38年の間にペストが5回発生した。そのうち、野牛溝の照壁山[7]では牧民の患者が多く死亡し、少数の生存者は別の場所に移動した（祁連県誌編纂委員会（編）　1993:481）

5. 1929年、扎麻什の鴿子洞・河東・河西にサラール族・土族が営農のため相次いで来住した（祁連地方誌編纂委員会（編）　1999:336）

6. 1929年、ゴミツェガン率いる共和県のチベット族40余戸が扎麻什河北岸に移住し、アリク千戸（現在の阿柔郷:引用者注）の許可を得て定住放牧と農地開墾を行った（祁連県誌編纂委員会（編）　1993:499）

7. 1928年、アリク千戸のチベット族数戸が税金を嫌い野牛溝へ逃亡したが、馬歩芳の配下に殺される（祁連県誌編纂委員会（編）　1993:499）

8. 民国初年、野牛溝油葫芦（現在の野牛溝郷南東部:引用者注）に剛察県のチベット族が仏寺を建てるが、民国期の民族紛争で破壊される（祁連県誌編纂委員会（編）　1993:510—511）

9. 1901年、シャタンゴンボ率いる青海東部のチベット族20余戸が扎麻什に移住し、大通県広恵寺のシャロ活仏から居住権を得る（祁連県誌編纂委員会（編）　1993:499）

10. 1895年、大通県・門源県などから回族が八宝地区（現在の祁連県中心地:引用者注）に流入し始める（祁連県誌編纂委員会（編）　1993:506）

11. 1723年、モンゴル族が八宝に仏教寺院を2座創建する（祁連県誌編纂委員会（編）　1993:510）

以上の情報から知りうることは、現在の祁連県中心地である八宝地区以西に現在のような人口構成を将来するような人口流入が開始したのはここ１００年程度のことであること、野牛溝に至っては敗残兵や逃亡者の逃げ込むような辺地であったことである。

また祁連側の資料に準拠する限り、祁連山脈の北麓に居住するユグール族が南麓に展開したのも現在から70年遡らない近過去である。むろん、これは祁連側の視野に入らなかっただけという可能性は否定できないが、その後20年近く「郷」すら設定されないという事実は、少なくとも祁連側の視界に野牛溝が入って以降、政治組織を形成しうるだけの勢力が当地に存在しなかったと想像しうるだけの傍証となるであろう。

しかも、野牛溝という地名自体が漢語由来であるという点にも着目すべきであろう。これとは対照的に、祁連県東部から南部の地名については「オボー」「ムルン」など相対的に「先住民」の言語と呼びうるモンゴル語が散見される。また、『祁連県誌』によれば、野牛溝という地名は現地に野生のウシが多く棲息していたことに由来するという。ただし、野生のウシは大躍進以後の食糧難の時期に乱獲されて激減したというが（祁連県誌編纂委員会（編）　１９９３：61）、逆に言えばそれまでは野生のウシが棲息し得る程度にしか人間が存在しなかったということである。

これらの事実から想像しうることは、現在の野牛溝郷に相当する地域は、少なくとも１００年少々以前では地域的な権力すら存在しない、逆に当局から追われた人々の潜伏しうる「化外の地」であり、その後漢語を共通言語とする人々を中心として移入が発生し現在に至る、という人口変動のストーリーである。また、その東に隣接する扎麻什も、ここ70―80年の間に農業開発が行われ現在のような状況に至っていると想像できるし、それ以前の状況も弱小勢力としか思えない移住者が定着しうるほどの人口希薄な土地であったと推測される。

以上、祁連県サイドからの情報をまとめてここ１００年の人口変動に関する概況を抽出した。しかし、ここでは混乱を避けるため敢えて述べなかったが、粛南県サイドの言説によれば祁連県西部、ことに野牛溝に関しては、ややディテールの異なった「過去」がそこに表象されている。

まず粛南県、ことにユグール族に関する言説では、「八字墩」つまりユグール側の野牛溝近辺の空間に対する呼称は特殊な意味合いを持つ。ユグール族の民間伝承では、「西至―哈至」という伝説の故地から東遷し、八字墩へやって来たと自らの来歴を記憶しているという[8]。その意味で、彼らにとって八字墩は「愛すべき新しい故郷」として認識される（甘粛省編輯組　１９８７：32―33）。

一方、粛南ユグール族自治県にとっても、自治県成立後しばらくの間は「八字墩」は自らの領域として認識されていた土地であり、そうした記述は粛南県政府が発行する印刷物にも散見しうる。この点は、祁連県の印刷物にはこの事実に関する言及が皆無であることと好対照をなす。

ただし、それでは八字墩は20世紀前半において、いかなる意味で「ユグール族の牧地」であったか。『裕固族通史』によるとユグール族のサブグループのうち、当時祁連山脈南麓を牧地として使用したと想像しうるのは「楊哥家」および「曼台部」である。ただし前者の中心地は祁連山脈北麓であり、１９４２年に出版された『祁連山北麓調査報告』には「うち15戸が現在青海八宝県の管轄を受けている」とあるので、総人口47戸２２９人のうち、１／３程度の利用率ではないかと推測しうる。なお、後者は『祁連山北麓調査報告』には言及がなく、後の調査資料には28戸２百余人と報告されているという（高自厚・賀紅梅　２００３：89，99―１００、蒙蔵委員会調査室　２００２：５２０）。

つまり、これを単純に合計しても３００人に満たない程度であり、現在の野牛溝郷の総人口３千人以上と比較しても「極めて少ない」とみなしうる数である。しかも、「曼台部」の中心地は現在の八宝郷北部であり、はるか西にある八字墩を全ての成員が常時利用していたとは考えにくい（甘粛省編輯組　１９８７：７）。さらに、祁連県だけでなく粛南ユグール族自治県も１９５０年代を通じて郷レベルの政治組織を八字墩一帯に設置していない点も、かの地が人口稀少であったことの傍証たり得るだろう。さらに、「八字墩」という地域名が「野牛溝」という地域名に置き換えられていくプロセスを考えても、後述する省境紛争が尾を引いている可能性も考慮しなければならない点はもちろんであるが、住民の民族的属性が変化しても地名は変化しない事例は中国各地に散見される。とすると、やはり八字

墩という地名およびその命名者たちであるユグール族の、当時の現地社会におけるプレゼンスの微小さをも反映しているのではないかと想像される。

## １９５０年代の省境を巡る紛糾および大規模人口移動

さて、黒河最上流地域の人口変動プロセスにおいて前述の人口流入過程以上に大きな意味を持つのが、１９５０年代を通じて展開される甘粛・青海両省の省境をめぐる紛糾と、それに付随する大規模人口移動である。これに関しては、既に簡単に触れているとおり、青海サイドに属する祁連県はほぼ何の言及もなく、甘粛サイドに属する粛南ユグール族自治県からの情報が大半となる。この理由には、被害者意識を持っている粛南ユグール族自治県が多くを語り、逆の立場である祁連県が沈黙しているという感情的な問題もあるだろうが、それと同時に、その背後にある公式見解も少なからぬ意味を持っていると思われる。『裕固族通史』は、その「前史」としての青海省の設置について以下のように述べる。

１９２９年に甘粛と青海が分離し、祁連山脈を境界とした。これが有史以来、初めて出現した省の境界であるが、具体的な境界線はきわめて不明確であった。当時の地連山脈地域は人煙稀であり、甘粛・青海いずれの省も実効支配を行っていなかった。遊牧民族はいつものように祁連山脈の南北で遊牧を行っていた。彼らは今までどおり、部落関係のみを認識しており、省の境界を問題とはしなかった。特に新中国成立前の十数年、馬家軍閥が甘粛・青海の地を統治しており、省の境界は有名無実であった（高自厚・賀紅梅　２００３：１５６）

ところが、事の発端は１９５４年であった。同年、国家地図出版社は『中華人民共和国行政区画図』を出版して、祁連山脈の主脈を甘粛・青海両省の境界として記した。なお、同出版社の地図は法的な効力を有するという（高自厚・賀紅梅　２００３：１５０，１５７）。これにより、祁連山脈以南の八字墩は、国家に青海省の領域として認知され

たことになる。そこで国家の法的承認を得た青海サイドは、ちょうど前年までに国民党残存勢力の掃討を終え、同時に扎麻什郷の行政村として野牛溝を設置した点から判断して、牧民の当地への浸透を推奨ないし黙認したものと思われる。それについては、『裕固族通史』にも「１９５４年末に至り、祁連山脈沿いに草山の紛糾は突如として緊迫した」（高自厚・賀紅梅　２００３：１５１）との表現で記されている。また、青海サイドが省境問題について一切語らないのも、要するに１９２９年の青海省設立時より祁連山脈が両省の境界であり、それは１９５４年に追認されたのだから省境の問題はそもそも存在しない、という原則に基づいているものと想像される。

なお、この時点の省境に関する紛糾は、翌１９５５年８月、甘粛・青海両省が代表を派遣し境界問題を協議することで一定の決着を見る。そこでは「黒河上流の牧地に対しては、さしあたり祁連山脈の主脈ではなく、黒河を境界として確定する」（高自厚・賀紅梅　２００３：１５１）ことになる。つまり、祁連山脈の主脈を境界として国家に認定されている青海省も、「牧民は歴史的な遊牧の伝統に従い祁連山脈の南北において遊牧し（中略）祁連山脈の西部では甘粛省側の人々が祁連山脈の主脈を越え、祁連山脈南麓の優良な牧地を占有していた」（高自厚・賀紅梅　２００３：１５７）という現実を主張の根拠とした甘粛省も、それぞれの立場において妥協する内容となっていたといえよう。

しかし、１９５８年に至り、祁連県側の状況が一変する。この年、南隣の海晏県で「国防関係の工場建設」[9]のため、３９７戸１７５２人が祁連の野牛溝・多隆などの土地へ移住することになる（祁連県誌編纂委員会（編）　１９９３：25，３８９）。なお、この件に関する記述は粛南ユーグ族自治県側の公式的な印刷物には一切出現しない。ただいずれにせよ、この移民数は、当時の野牛溝の人口数・構成を激変させる大事件であったことは想像に難くない。

いみじくも１９５８年10月、祁連山脈南麓において一層激化した省境問題の処理に関する会議が蘭州で開かれるが、その際に青海サイドは１９５５年に「双方が締結した取り決めを無視し、中華人民共和国行政区画図に従って境界を画定することに固執した」（高自厚・賀紅梅　２００３：１５１）と評されている。法的には有利な立場に立ち、しかも上述の移民を抱える青海サイドにとって牧地の確保は至上命題であり、もはや譲歩の余地は乏しかったものと推測

される。

一方の甘粛サイドも、１９５５年の取り決めでは長期的には持ちこたえられないと既に判断しており、祁連山脈主脈以南から撤退する計画を企画していたと『裕固族通史』は論評する。以下はその顛末である。

かつての武威・張掖・酒泉の三地区が合併して形成された張掖地委は１９５８年12月30日に省委の決定を貫徹する旨の「青海境界問題の処理および関連する問題を解決するための伺い報告書」を作成した。これはつまり粛南・粛北・阿克塞の３自治県を北に移動させるもので、粛北と阿克塞の２自治県を合併して「党城モンゴルカザフ族自治県」とし、「自治政府機関は党城湾に置く」こととした。粛南県は皇城灘に移動し、「皇城ユグールチベット族自治県」あるいは「粛南ユグールチベット族自治県」へと改称することとした。計画は「１９５９年夏には基本的に撤退する」ものであった。

１９５９年２月、粛南県は省委決定と張掖地委の「報告書」に基づき、具体的な移動案を制定し、３回に分けて移動させることとした。第１回は２月に開始し、第２回は５月下旬に開始し、第３回は７月末に終了するものだった。３回で合計１２６１戸、６５６８人の群衆を移動させるが、これは当時の全県総人口の半分以上であった。移動する各種家畜は24万頭で、当時の全県家畜総数の80％を占めていた。（高自厚・賀紅梅　２００３：１５２）

しかしこの大移動計画は、１９５９年６月にこの計画を察知した中国共産党中央からの命令によって中止させられる。その後、甘粛・青海両省により事後処理が検討されることになるが、本論の言及範囲である黒河最上流部に関する限り、既に祁連山脈南麓に居住していたユグール族は北麓に移動しており、また野牛溝には前述したように別地域からの移民が流入していたこともあり、結局のところ祁連山脈主脈を省境とすることで最終的な決着を見ることになる。

これ以後、当地では基本的に省境を巡る紛糾は発生していない。ただし、野牛溝郷に隣接する粛南ユグール族自治

県の複数の郷政府関係者によると、現在も省境近辺での祁連県側からの越境放牧がしばしば問題になるそうである。そして、その原因として50年代末に甘粛・青海それぞれで発生した大規模な人口移動の結果としての黒河最上流域周辺の人口増加が指摘されている。

その後の人口変動に関しては、１９８０年代以前の郷ベースの統計資料が現状としては入手不可能であるため[10]具体的な数字で跡付けることはできないが、祁連県全体の人口は第１回人口センサス（１９５３年）では８０２３人、第２回（１９６４年）では１９１４０人、第３回（１９８２年）では３６４０５人、第４回（１９９０年）では４２３９２人と変遷している（祁連県誌編纂委員会（編）　１９９３：１０７、祁連地方誌編纂委員会（編）　１９９６：74）。これから年平均の人口増加率を算出すると、１９５３～６４年は８．25％、１９６４～８２年は３．64％、１９８２～９０年は１．92％となる。

一方、中国全土の人口増加率は、大躍進の影響を顕著に受け増加率が極端に低い１９５８―６１年までを除外すれば１９５０年代が２％台前半、１９６０年代が２％台後半～３％台前半、１９７０―７５年が２％台前半、１９７６年以降は1.5％未満である（国家統計局（編）　１９８９：88）。祁連県が「一人っ子政策」の適用が緩やかな少数民族地域に位置していることを勘案すれば、第３回人口センサス以降の人口変動は自然増のみでも説明可能であると思われる。一方、第１回～第２回人口センサスまでの人口変動は猛烈な社会増の影響を受け、第２回～第３回人口センサスまでの人口変動においても、一定程度の社会増の影響が想定できよう。なお野牛溝郷・扎麻什郷の状況も、基本的にはこれと同様のプロセスを辿っていると推測しても大幅な誤差は生じないであろう。

## 今後の展望

本論では、黒河最上流域を議論の対象として切り取った上で、そこの人口変動プロセスを多様な、かつ個別的には

断片的な資料から再構成して示した。今後の課題は、この人口変動に関するデータを生産様式・水利用の変遷モデルの中に如何に組み込んでいくかという作業となる。詳細については別稿にて事例を挙げつつ示すことにしたいが、この地域においては、生業の違いは民族的な線と一致しないこと、同一生業内部での民族的な差異はきわめて小さいことが指摘しうる。この点は、他の黒河上流域や下流域などと比較してもその徹底性という面で際立っている。

こうした特徴は、黒河最上流域が比較的近年の移民によって構成されていることに起因する経験の類似性や、自然環境による制約からもたらされているものと想像されるが、これは当地域の水利用の変遷モデルを作成する際にメリットとして作用するだろう。なお、現地調査で収集した個別事例などから生業・水利用の実態の詳細を明らかにした上で、それを定量的な表現形式へと変換していくことが当面の解決すべき問題である。

本研究は総合地球環境学研究所が行う研究プロジェクト「水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史的変遷」（通称オアシスプロジェクト、プロジェクトリーダー中尾正義）の成果の一部である。

## 注

(1) オアシスプロジェクトの詳細な実施内容に関しては、同プロジェクトのHPである「Oasis Projecthomepage」(http://www.chikyu.ac.jp/oasis/) を参照されたい。

(2) ある程度考慮されうる事項が存在するとすれば、それは例えば年間で黒河の水をどれだけ内モンゴル自治区へ流さなければならないか、というような国家通達の類である。

(3) 筆者自身、エゼネ旗で現地調査を行った際には、黒河下流部はそうした文脈で理解することに意味があると感じた（Cf. 尾崎・中村 2002）。なお、かつて「エチナ」と表記していた地域を本論文で「エゼネ」と表記しているのは、本年よりオアシスプロジェクト内部で定められた地名・民族名のカナ表記方法に準拠したためである。また「ユーグ族」と「ユグール族」の関係

についても同様である。ただし、漢語で書かれた書名に言及する場合には原文どおり「裕固」と表記した。

(4) 祁連県は海北チベット族自治州に属するが、県はもとより郷に至るまで民族名が冠されない点は、北に隣接する甘粛省粛南「ユグール族」自治県や、それに内包されるいくつかの「チベット族」郷・「モンゴル族」郷の存在とは鋭い対照をなしている。

(5) ただし、「民族」という制度自体が中華人民共和国成立以後に整備された点を想起すれば、こうした言説は多分に「後付け」の感が否めない。

(6) なお、八宝郷の北西部も黒河に面しているが、八宝郷の行政村は南部の八宝河流域に集中していること、上述の黒河は祁連山脈を深く削る形で流れており、本論で想定する最上流部よりはそれ以外の上流部に近い景観を呈するため、本論の考察範囲からは除外してある。

(7) 現在の野牛溝郷東部、辺麻村である（祁連県誌編纂委員会（編）　１９９３：52）。

(8) 『裕固族東郷族保安族社会歴史調査』には、かつてユグール族の一サブグループである西八個家が八字墩を牧地としていたが、１８８０―９０年ごろに祁連山脈北麓へ移住したとの記述がある（甘粛省編輯組　１９８７：４）。

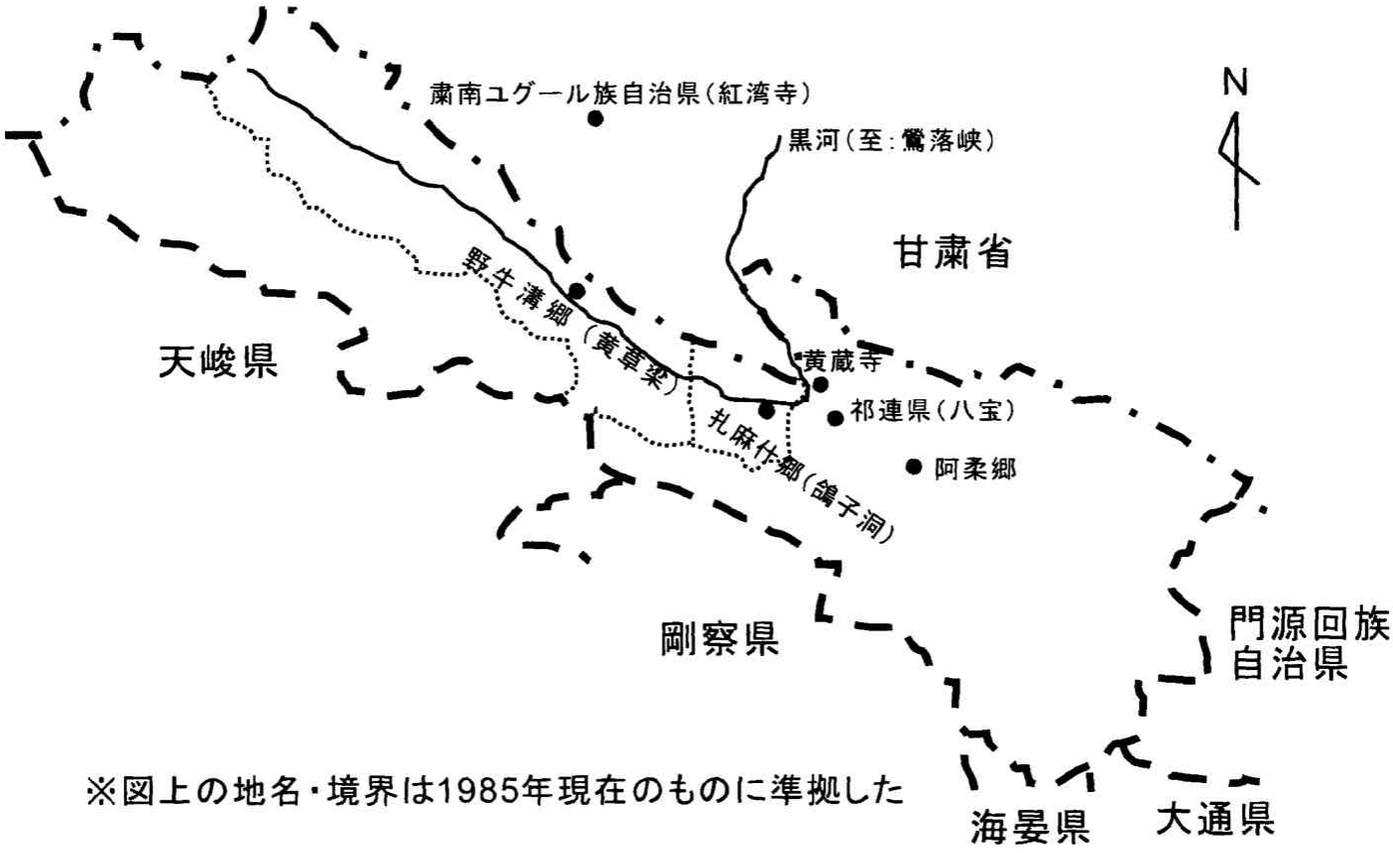
(9) 現在では、それが核実験施設であったことは中国国内で発行されているガイドブックにも掲載されている公然の事実となっており（Ｅｘ．張志軍（主編）　２００３：７）、また現地には観光資源として「原子城」という石碑すら建立されている。

(10) そもそもそうした統計資料が現存しない、という可能性も否定できない。

## 参考文献


甘粛省編輯組　１９８７　『裕固族東郷族保安族社会歴史調査』甘粛民族出版社。
高自厚・賀紅梅　２００３　『裕固族通史』甘粛人民出版社。
国家統計局（編）　１９８９　『中国統計年鑑　１９８９』国家統計出版社。
蒙蔵委員会調査室　２００２　「祁連山北麓調査報告―辺疆調査報告之六」鐘進文（主編）『中国裕固族研究集成』民族出版社、517―528ページ。
尾崎孝宏・中村知子　２００２　「エチナ牧畜調査報告」『人文学科論集』56：45-90。
祁連地方誌編纂委員会（編）　１９９６　『祁連年鑑１９８６―１９９４』祁連県。
１９９９　『祁連資源誌』蘭州大学出版社。
祁連県誌編纂委員会（編）　１９９３　『祁連県誌』甘粛人民出版社。
張志軍（主編）　２００３　『青海実用手冊』青海人民出版社。

# 地図：祁連県とその周辺




※図上の地名・境界は1985年現在のものに準拠した